

オズボーンの復讐

ヘンリー・ジェイムズ 著

Osborne's Revenge

by Henry James

李 春 喜 訳

LEE Haruki

This story concerns Philip Osborne's quest to avenge his best friend Robert Graham's suicide as a result of his unrequited love for Henrietta Congreve. Osborne learns about the incident from Mrs. Dodd who happens to stay in the same town as Graham. According to her, Graham commits suicide because his love for Henrietta Congreve was spurned. In addition, Mrs. Dodd implies to Osborne that Miss Congreve flirted with him. Hearing this, Osborne is determined to get revenge.

But by the end of the story, Osborne realizes that he has taken action and behaved based on the "reality" he has. He finds out that Miss Congreve is actually a good-natured, innocent young woman who had already been engaged prior to Graham's profession of love for her. She is in no way a deceitful woman.

"Osborne's Revenge" is a representative of a prominent theme of Henry James: appearance vs. reality. The "reality" that Osborne accepted as true was merely an illusion. This theme of appearance vs. reality was to be further developed in James' later works.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ) Short Story (短編) Translation (翻訳)

Reality (現実) Appearance (見せかけ)

I

フィリップ・オズボーンとロバート・グラハムは仲の良い友人だった。グラハムはその夏、かかりつけの医師に勧められてニューヨークにある温泉地へ湯治に来ていた。一方、弁護士のオズボーンは、仕事が急に忙しくなっていることもあり、感謝されないというわけではなかったが（本当のところは分からない）、しかしまったく敬意を払われることなく、六月と七月は町

に閉じ込もっていた。普段、音信の途絶えることのないロバートから七月の中旬になっても何の連絡もないので、オズボーンは少し心配になった。グラハムは素晴らしい手紙を書く男だった。家族がいるわけでもなく仕事をしなければならぬわけでもないで、時間はたっぷりあるはずである。オズボーンは手紙を書き、何の連絡もしてこない理由を尋ね、すぐに返事を寄こすよう要求した。二、三日後、彼は次のような手紙を受け取った。

フィリップへ 君が思っているとおり、あまり調子が良くないんだ。この温泉はひどくて、まったく効果がなさそうだ。それどころか、逆に悪くなっていくみたいだ。よけいに悪くなっているのだから、来なければ良かったと思うくらいだよ。『修道院』という作品の「白い妖精」を覚えているかい？ 泉のそばで主人公の前に現れる妖精のことだけど。その妖精みたいな女性がこの温泉にいるんだよ。君も知ってのとおり、ここでは硫黄の臭いがするけどね。その若い女性のことを考えてみてくれ。僕は彼女の虜になっちゃったんだ。ここを離れられなくなっちゃったんだよ。でも、もう一度やってみるつもりだ。頭が変になったとは思わないでくれ。来週には会えると思うよ。

R. G.

この手紙を受け取った次の日、オズボーンは、子どもの病気のために町を離れられなくなった女性の友人宅で、一人の婦人に会った。グラハムが逗留することにした温泉地から彼女は帰ってきたところだった。ドッドという名の未亡人だった。彼女はよくグラハムと会っていた。浮かぬ顔でグラハムについて話す一方、目は多くのことを語っていた。内緒話をしたがっているような様子を見てとったオズボーンは、彼女が誰にも聞かれずに彼と話しができるようにした。口もとを扇子で隠し、グラハムが失恋のためにひどく傷ついていると彼女はオズボーンに打ち明けた。早急に何か手を打たなければならないということだった。彼女の話はこうだった。今年の夏の始め、近くの町に結婚した姉と住んでいるコングリーブという女性とグラハムは知り合いになった。彼女は可愛い女性ではなかったが、頭のよい、品のある気持ちのいい女性だった。グラハムはすぐに彼女と恋に落ちた。周囲の友人たちはみんな分かっていたが、彼女はグラハムをその気にさせ——小さな保養地では恋愛のうわさが広まるのにそんなに時間はかからないものだ——その月の終わりには、はっきりと口にされたわけではなかったが、彼らの婚約は時間の問題だと思われていた。しかし時を同じくして、コングリーブ嬢がもっとも目を引く魅力の一つである小さな集団に一人の男性が加わった。ホーランドとかいう西部出身の男性で、グラハムと同世代だが、見た目はグラハムに勝っていた。彼女の愛情が他の男性に向けられているという周知の事実にもかかわらず、彼はただちにこの若い女性に関心を持った。同じ事実等に等しく無頓着なヘンリエッタ・コングリーブは、からだ全体が微笑みであり誘惑そのものであった。実際、一週間も経たないうちに、古い愛から新しい愛へと彼女は意図的に愛

情を移した。グラハムは無関心なものへと変貌させられ、彼女は彼に会うことをやめ、話しかけなくなり、彼について考えることをやめてしまった。それにもかかわらず、自らの傷ついた気持ちや、コングリーブ嬢とホーランド氏が一緒にいるという事実にある種魅了されたかのようにグラハムは温泉地にとどまっていた。しかも、彼が求愛を撤回したことには十分な根拠があるので、こそこそするのは彼の方ではないのだと明らかに周囲の人にそう思っただけで欲しかったのだ。自尊心を失わず、遠慮がちで多くを語らなかったが、心の痛みが深いもので、受けた傷がほとんど致命的であることを見てとるのは、彼の友人たちにとって難しいことではなかった。グラハムの悲しみが慰められ、不幸な情熱を思い出させる場所や物と接触する機会、とりわけ、コングリーブ嬢と毎日のように顔を合わす機会が取り除かれなければ、彼が正気を保てるかどうかの保証は持てないとドッド夫人は断言した。

この話には誇張があることをオズボーンは最大限考慮した。女性というものは——彼は考えた——話を都合よくまとめ上げるのが大好きである。特にそれが不幸の話のときは。しかし彼は大変心配になり、ただちに長い手紙を書いた。その手紙の中でオズボーンは、ドッド夫人の話がどこまで本当なのかを尋ね、もしそれがかなりの部分事実であるのなら、気晴らしのためにすぐに町に出てくるよう強く勧めた。グラハムは実際に姿を現すことでそれに応えた。そこでオズボーンはすっかり安心した。グラハムはこの数ヶ月で今までにないほど健康で元気そうだった。しかし彼と話してみると、精神的には少なくとも彼が深刻に病んでいることが分かった。元気がなくぼんやりとして、思考がまったく働いていなかった。オズボーンの問いにも援助の申し出にも反応がないので、オズボーンはそれを悲しい想いで受けとめた。彼は生まれつき感傷的な悩みを大変なことだと考えるタイプではなかった。階下の住人が失恋で引きこもっている、だからといって階段を上がる自分の足音に気をつかうような人間ではなかった。しかし、グラハムをからかっても何の効果もないだろうし、楽しさというのは必ずしも他人に感染するわけではないということをグラハムは証明しているように思われた。グラハムはオズボーンに、自分のことを思知らずな奴だと思わないで欲しいということ、そして、今回のことが癒されるまでその件については触れないで欲しいということを懇願した。グラハムは今回の件を忘れようと決意していた。彼がそれを忘れることができたとき——人はそういうことを忘れるものなので——少なくとも今回の件の先端をうまく過去に追いやることができたとき——このことについてすべてを話すつもりだと言った。当面の間は、自分の気持ちを他のことで紛らわせなければならなかった。何をすればいいのか決めるのは容易ではなく、当てもなく旅をするのも難しかった。しかし、この耐えがたい暑さの中でニューヨークにとどまるのも不可能だった。ニューポートになら行けるかもしれない。なかった。

「ちょっと待って」とオズボーンは言った。「コングリーブ嬢もニューポートへ行っただけじゃなかったのか？」

「僕の知るかぎり、そんなことはないと思うけど」

「行く予定はあるだろうか？」

グラハムは黙っていたが、とうとう大きな声で言った。「何てこった！じゃあ、行けないようにしてくれ！僕が望むのはそれができないようにすることだけだ。僕にはそれができないから。こんな情けない人間を見たことがあるかい？」と、彼はぞっとするような笑顔で言った。「どこに行きゃいいんだい？」

フィリップは自分の机に行くと、赤いテープでとめた書類の束を詳しく調べ始めた。その束からいくつか書類を選ぶと、それらをばらばらに並べた。それからグラハムの方に振り向き、彼の目を見て言った。「ミネソタに行くんだ」それは気が滅入るような提案だった。そして、それは気が滅入るように意図されていたが、グラハムが抵抗でもしてくれればオズボーンは嬉しかっただろう。しかし、グラハムはオズボーンを重々しい表情で見つめて座っていた。その表情は、(そのあとで起こったことを考えると)この作戦全体に悲しげな陰を落としていた。「何てこった！彼は頭がおかしくなったんじゃないだろうか？」とオズボーンは思った。「君に必要なのは」と彼は言った。「他に何か考えることだよ。ぶらぶらしていて、ああいう類の傷が癒されるとは思わないね。片づけなきゃいけない仕事がセント・ポールにあるんだ。その気になりさえすれば、他の人と同じように君にもできると思うんだが。仕事それ自体は単純なんだから信用できる人物が必要なんだ。それで君に頼もうと思うんだが」

グラハムは机にやってきて書類を取り上げると、機械的にそれに目をとおした。

「今じゃなくてもいいよ」とオズボーンは言った。「もう夜中を過ぎてる。眠ったほうがいい。明日の朝もう一度じっくり考えてみてくれ。気に入れば、明後日から始めてくれればいいから」

次の日の朝、かつての朗らかさのかなりの部分をグラハムは取り戻したように見えた。とりとめもないことを話しては笑い、数時間の間、コングリーブ嬢のことは忘れてしまったかのように見えた。もう旅行に行く必要はないのではないかとオズボーンは思い、そう思えるようになったことを嬉しく思った。しかしグラハムはそれを強く否定し、仕事の内容を説明するよう求めた。グラハムが仕事の内容を理解すると、オズボーンは満足して彼を送り出した。

それに続く週はとても忙しく、フィリップはグラハムの仕事がうまくいったかどうかについて考える暇さえなかった。二週間も経たない頃、彼は次のような手紙を受け取った。

フィリップへ 無事ここに着いたよ。でも、調子は最悪だ。どう言ってもいいのかわからないけど、僕は何しに来たのか完全に忘れちゃったんだよ。何をすべきで、何を話せばいいのかどうしても思い出せないんだ。君にもらった書類もノートも何の役にも立たない。十二日——昨日はたくさん書いたので、考えをまとめるために散歩に出かけたんだ。きっぱりと考えをまとめたよ。僕のことを頭がどうかしているとか、悪意に満ちているとか、単に君を苛々させたり怒らせたりするだけの者だと思わないでくれ。僕の精神がどういう状態にあるか考えてみて欲しいんだ。それを感じたこと

のある人間だけが理解できるのさ。そして、それを感じたことのある人間ができるのは、僕が振る舞うように振る舞うことだけなのさ。人生から失われてしまったのだ——「楽しみが」とは言わないよ（それがなくてもかまわないからね）——意味が失われてしまったのだ。僕は君の記憶と愛の中で生きていくよ。その方が自分を軽蔑しながら生きていくよりどれだけましかならないからね。さようなら。

R. G.

セント・ポールにいる同僚からグラハムの最期をオズボーンが知ったのは三日後だった。その同僚はグラハムが会うことになっていた人物だった。彼はホテルで自らの頭を撃ち抜いた。彼はお金をいくらか遺しており、それをどのように処理すべきか書面にしたためていた。もちろんそれは彼の遺言どおりに処理された。グラハムには近親者がいなかったで、彼の最期を知った者はごく限られていた。しかしその数は、フィリップ・オズボーンの心の広さを表す程度には多かったと言っておこう。オズボーンとグラハムはほとんど情熱と言っていいほどの友情で結ばれていた。グラハムがいなくなった今、オズボーンはその結びつきの強さを意識するようになった。どんな人間的な結びつきよりも、グラハムとの友情を大切にしていたのだと彼は感じた。二人は十年來のつき合いで、人生における最も活動的な時期の成長と時を同じくして、二人の間柄は親密になっていった。二人の間柄は、数多くの喜びをともに楽しむこと、多くの危険を経験すること、数多くのアドバイスと固い信頼の交換、そして、お互いの利益を約束し合うことを通じて強固なものとなっていった。その結果二人はお互いの関係を、移ろいゆく世界の中で唯一変わることのない事実、つまり、人生における唯一確かなものと考えようになっていった。仲の良い友人の間でよく見られるように、性格や好みや外見において二人はまったく違っていった。グラハムの方が三歳年上で、ほっそりとしていて小柄だった。身体的にそんなに丈夫だったわけではなく、感じやすくおとなしい性格で、気まぐれで物惜しみのしないタイプだった。オズボーンがよく知っていたように、彼とくらべると実際グラハムはかなり華奢だった。二人の仲の良さは周囲の人にはしばしば謎だった。世間の人は、この取り柄のない無精な病弱者とオズボーンがこんなにも仲が良いことを知って不思議に思うのだった。彼らにとってグラハムは、人前でも短い単語を使ってぼそぼそと話すだけで、仕事らしい仕事は何もせず、ただ自然が、彼に気難しくなる権利だけは与えたかのような態度をとる人間に過ぎなかった。一方、グラハムの支持者たちは——主に女性なのだが（そのおかげで、ときどき彼に向けられる「女々しい」という非難からうまく救われた）——彼がなぜ、まるで雑貨食料品の店主や葬儀屋の陪審員団を説得するかのように女性に話しかけ、世の中を一つの大きな「訴訟」のように見る平凡で勤勉なだけの弁護士に関心があるのかまったく分からなかった。オズボーンの気持ちや振る舞いについてのこの解説は、あまりにも皮肉が強すぎて妥当性を欠くが、グラハムとの際立った対照性を持つ人物を描くためだとすれば、それは十分許容されるものだ

っただろう。オズボーンはあらゆる意味で大きな人間だった。身長は六フィート二インチ、ボクサーのような胸を持ち、日に焼けたはっきりとした顔色で、体を動かさない生活にありがちな有害な行為をうまく克服していた。実際、彼には虚栄心のかけらもなく、きわめて男前だった。彼の人格は身体に対応しており、あるいは人が言うように、彼の人格は身体の延長で、それが身体を完全なものにするのだった。そして、彼の精神は彼の人格を保証していた。彼の中にはすべてのものが一つに収まっていた——健康と度量、能力とエネルギーそのものだった。グラハムは一度オズボーンにいくぶん残酷に言ったことがある——というのもグラハムは、オズボーンよりもはるかに美しいことを言うのと同じく、はるかに残酷なことをあの小さな細い声で言うことができたからだ——君は馬のように働くが犬のようにしか愛せない、と。

理屈の上では、精神的な悩みに対するオズボーンの治療方法は働くことだった。彼は仕事に二倍の関心を向け、友人を失った悲しみにきっぱりと折り合いをつけようとした。しかし、彼の悲しみは彼の意志よりもはるかに強いことが分かった。そしてその悲しみは、何らかの犠牲や献身的な行為がなければ、癒されることを執拗に拒否しているように感じられた。オズボーンには、しかるべきものに対する本質的な親切心や深い憐れみと慈悲心があった。しかし、彼の本質が不正の感覚に強く揺さぶられるとき、魂の奥底に横たわっている怒りと敵意の泉が醸成され、その水位を上げ、ついにはそれが彼の良心を飲み込んでしまうのだった。この苦い泉が揺さぶられ、急速に水位を上げていることを彼は感じていた。悲劇の序幕に登場した若い女性とグラハムの死の間を彼の思いは何度も執拗に行き来し、彼女を憎むという野蛮な欲求を胸に感じた。オズボーンの友人たちは彼が近頃まったく愉快な人間ではなくなっていることに気がついた。感じのよい人間であることをやめれば、我慢のできない不愉快な人物にオズボーンは容易になることができた。悲しみによってやさしく穏やかにはなっていなかった。彼は憤激した。正義が声高に叫んでいるように思われた。ヘンリエッタ・コングリーブは彼女の愚行がもたらしたものに向き合い、惨めにも自殺というおぞましい形で彼女の犠牲となった男の姿を胸の中に永遠に携えていくべきだ、と。恐らくオズボーンは間違っていたかもしれない。しかし彼はまったく誠実だった。この知性の持ち主の傷ついた威厳を癒すために、それがまったく愚かなほど無意味だと考えたであろう計画に、彼の頑健な知性が他者に益するために動員されたということは、純粋な愛情というエネルギーの存在を示す確固たる証拠である。オズボーンはグラハムをくだらない愚か者とは言わなかったので、彼のことをとても愛していたに違いない。しかし、グラハムを愛するのと同じくらいオズボーンが彼のことを哀れんでいたことも事実である。グラハムの明白な才能と美德はそれが表面に現れないようにしていたけれども。今や彼はいなくなったので哀れみが真っ先にやってきた。そしてその哀れみは、コングリーブ嬢への情状酌量に対するすべての要求を情け容赦なく否定することにオズボーンを駆り立てそうであった。少なくとも当分の間は、グラハムは不当に扱われ、気まぐれにも彼の命の光は消されてしまったという以外の発言にオズボーンが耳を貸すことはありそうになかった。あきらめに浸

ることなど不可能なことに思われた。彼ができる最善のことは、もちろん、グラハムを生き返らせることではない。しかし少なくとも、グラハムの恨みを晴らしてやり、コングリーブ嬢は報いを受けるのが当然だという慰みは得られるかもしれない。オズボーンはまったく仕事をすることができなかった。三日間彼は絶望的な怒りの中をさまよっていた。三日目に彼はドッド夫人を訪ね、コングリーブ嬢がニューポートに出かけて、結婚した二人目の姉と一緒にいることを知った。彼は帰宅すると——なぜそうするのか理由も分からず、ただ、そうすることが何かをすることであり、そうすることはもっとたくさんのことを自分にできるようにすることだと感じながら——旅行かばんを詰め、ニューポート行きの船に向かった。

Ⅱ

ニューポートに到着して何人かの友人を訪ね、多くの知り合いに出会ったあと彼が最初に尋ねたのは、コングリーブ嬢の滞在場所と彼女の日常がどのようなものであるかということだった。しかし、彼女のことはほとんど知られていないということが分かった。彼女は姉であるウィルクス夫人のところに滞在していたが、一緒にいるところはまだ一度しか見られていなかった。さらに、ウィルクス夫人は病気でとてもひっそりと暮らしていることを彼は知った。彼女の家の場所を確かめると、家のそばをとおって彼は納得した。表通りから隠れたわき道にあるきれいな家だった。さまざまなものがその家の豊かさと心地良さを表現していた。彼がそばをとおりかかると、客間の窓の閉じた雨戸からピアノの音色とともに高く美しい歌声が聞こえてきた。オズボーンは音楽に特に関心があるわけではなかったが、立ち止まってその歌声を聴いているうちに、魅力的な芸術に対する情熱をグラハムが持っていたことを思い出し、この歌声こそが悲しみへと彼を誘った音色なのだと思った。気の毒なグラハムは、すべてのものに対してそうであるように、ここでも自らの趣味の良さを発揮したのだ！歌声の持ち主が素晴らしいイラストで曲のクライマックスを飾ると、そのあとに静寂が訪れた。雨戸の格子の音が聞こえたような気がして、オズボーンはゆっくりとその場を立ち去った。二日後、ニューポートの岸壁と平行して並んでいる長い通りを彼は一人悲しい気分で歩いていた。ご存じのように通りのどの場所からも岸壁へは歩いて五分で行くことができる。彼はすでに一週間近く目的の地に滞在しているにもかかわらず、復讐には一歩も近づいていなかった。彼の満たされない欲望は彼の足もとにとりついていて、そしてそれは、古い友人や新しい友人にひっきりなしに遭遇することや、楽しみを買い求めたり売り歩いたりする雑多人たちの心踊る光景によって自由で楽しくなったかもしれない彼の思考に幽霊のようにまとわりついていて、オズボーンはこの世界をととても愛していた。もちろん彼は自分の怒りに執着していたけれども、それが宴会における骸骨のようになり、を潜めてしまっていることを密かに感じていた。彼は自然も愛していた。そしてこの両者の間で、ときとして彼は自分の怒りを恥ずかしく思うのだった。いずれにせよ、

自らの神聖な行為を追及すると同時に、このわき道のつきあたりに光る青くて深い海の広がりをちらっと目にするとき、彼はほっとするような感謝の気持ちを感じるのだった。彼はただちに岸壁へと下りていく道に進んだ。道が途切れた場所に四人乗りの馬車が停めてあった。その持ち主は見当たらなかった。そこをとおり過ぎると、不意に突き出た小路によって岸壁の表面が砂浜とつながっている場所に出た。その小路を下ると、遠く広がる砂浜と急激に盛り上がる波のうねりと同じ高さにいる自分に気がついた。気持ちのいい風が海から吹き寄せ、小さな白波が騒々しいたくさんの音と同時に転げまわっていた。オズボーンは一瞬心地良い気持ちの高ぶりを感じた。岸壁のほうにちらりと目をやり、その方向へ歩みを速める原因となった光景をほんやりと認識したとき、この心地良い気分の影響の中で彼はまだ数歩も歩いてはいなかった。波うち際から十二ヤードほどのところにある広い水平の岩の上で、五歳くらいの男の子——ブロンドの髪をして上品に着飾られた美しい男の子——が、恐怖におびえて手をねじり足を踏みならして立っていた。状況を理解することは難しくはなかった。海面がまだ低い間に男の子は岩の上によじ登り、水面に浮かぶ豊富な海の恵みを小さな木のシャベルで掻き回すことにあまりにも夢中になって、海面が上がってくることに気がつかなかったのだ。点在していた岩を波は完全に覆ってしまい、砂浜と彼の間でうねっていた。男の子は風と波に向かって大声を上げ、救助にいくオズボーンの声にまったく応えられなかった。そうしている間に、オズボーンは男の子を浜に上げる準備ができた。しかし、ジャンプして飛び越えるには水面の幅があまりにも広いことを嫌悪感とともに見て取った。しかも、あわてて取り乱した女性という形で男の子の親が今にも現れることを考えると、服を脱ぐのは適当ではないと考えた。仕方なく彼は、それ以上躊躇することなく水に入ると、男の子を抱えて水を掻き分け、何とか彼を陸地に連れ戻した。オズボーンの腕の中で彼は怯えた鳥のように震えていた。男の子を立たせて落ち着かせると、「一緒に来た大人はどうしたんだい？」と尋ねた。

少年は少し離れたところにある岸壁の下の岩を指差した。彼が指差した方角に目をやると、座っている女性の帽子と羽飾りらしきものが岩の反対側の端に見えた。

「あれがヘンリエッタ叔母さんだよ」と少年は言った。

「ヘンリエッタ叔母さんを叱らなきゃいけないなあ」とオズボーンは言った。

「さあ、おいで。叔母さんを叱りにいこう」オズボーンは少年の手を取ると、非難されるべき叔母さんの方へ向かった。彼らは岩の横まで砂浜を歩き、正面からその女性に近づいた。小石の上を歩く彼らの足音を耳にして、彼女は顔を上げた。若いその女性は、アルバムを膝の上に置いて大きな石に座り、スケッチに夢中になっていたようだった。いつもとは違う様子が気がついた彼女は、立ち上がってアルバムをポケットにしまった。びしょ濡れになったオズボーンのズボンと上着、取り乱した子どもの様子が事故の性質を物語っていた。彼女は小さな甥っ子に手を差し出した。少年はオズボーンの手を離し、走って行って叔母さんの首に抱きついた。少年を抱き上げキスをして、彼女は問い詰めるようにオズボーンを睨んだ。

「その子はあなたの手の中ではまったく安全なようだね」と、帽子を取りながらオズボーンは言った。「彼は素晴らしい冒険を経験したところなんだ」

「まあ、どうしたの！」と、血の気のない少年の顔に再びキスをして女性は叫んだ。

「このおじさんが水の中を助けにきてくれたんだ。どうして僕をあそこに置いてきぼりにしたの？」と少年は大声で言った。

「一体、何があったのでしょうか？」と、いくぶん先制を期するような調子でその若い女性は尋ねた。

「溺れてしまうほど深い水に囲まれた岩の上にお子さんを置いてこられたようです。彼を勝手にそこから連れ去りました。お子さんは傷をしたというより怖かったんだと思います」

若い女性の表情は青ざめ、暗い目をしていた。彼女の顔つきに美しいと言えるものはなかったが、極めて表情が豊かで知的であることをオズボーンはすでに見て取っていた。顔が少し赤くなり、目に一瞬光が走った。顔が赤くなったのは自分の怠慢に対する後悔のせいで、目に光が走ったのはオズボーンの口調に込められた非難に対する苛立ちのせいであるように思われた。しかし、それは見当違いだったかもしれない。少年を膝の上にのせ、激しく力を込めて抱き寄せ、何度もキスをしながら彼女は岩の上に座っていた。彼女が顔を上げたとき、目の中の光は二粒の涙に溶けていた。オズボーンが妙な男性ではないことを見てとると、少年はずっと彼女の目の届くところにおり、目を離したのはほんの数分のことだったと、短く自らの正当化を試みた。彼女の弁明は小さな女の子の手を引いて近くの岩陰から現れた二人目の女性——少年の世話係のようだった——の到着によってさえぎられた。本能的に、少年の濡れた衣服が彼女の目に止まった。

「まあ、コングリーブ様、奥様は何とおっしゃるでしょう！」と、まさしく子どもの世話係が話すような調子で彼女は叫んだ。

「ウィルクス夫人はこちらの男性に『心からお礼を申し上げます』と言うでしょう」と、コングリーブ嬢はきっぱりと言った。

彼女がそう話している間、オズボーンは、その表情と振る舞いに強く感銘して彼女を見つめていた。彼女の外見に、謙遜と率直さ、新鮮な若々しさと洗練された振る舞いの特異な結合を発見し、それは二人の間柄がさらに前進する漠然とした可能性を示唆していた。彼女を観察することがすでに楽しみになっていることをオズボーンは感じていた。この十日間、邪悪な女性を彼は探していた。そして、突然このように魅力的な女性と向き合うことはつかの間の安心を彼にもたらしたので、世話係の登場に彼は電気ショックのように驚いた。

しかしながら、驚いたことにコングリーブ嬢は気づいていないようだったので、自分の驚きを彼は隠しておくことにした。オズボーンの個人的な苦境に遅ればせながら気づいたコングリーブ嬢は、岸壁のところで彼が見かけた馬車を使って帰宅するよう彼に申し出た。しかし、歩いて帰る方がいいように思われると言って、彼女の申し出に感謝し丁重に断った。彼は少年に

手を差し出し、お別れの挨拶をした。コングリーブ嬢が少年の手を離すと、少年はやってきてオズボーンの手には自分の手を入れた。

「そのうち君も足が長くなって、水が怖くなくなるよ」と言った。彼は少年に話しかけていたが、目はコングリーブ嬢をじっと見つめていた。彼女が正式に感謝の意を表す機会を彼は望んでいるのだとコングリーブ嬢は考えたに違いない。

「この子の母親は喜んで感謝の気持ちを伝えると思いますわ」と彼女は言った。

「お気遣いには及びません」とオズボーンは言った。そして、彼は笑って（このように言えることは素晴らしいことだが、彼は本当に笑っていた）次のように言った。

「このことについては何も言わないのが一番いいと思います」

暗い目の中にやさしい光をたたえて、その若い女性は言った。「私一人の利益を考慮するだけでしたら、私はきっと口をつぐんでいるでしょう。しかし、この小さな犠牲者が沈黙をお約束するほど恩知らずではないことを私は望みます」

オズボーンは体をこわばらせた。というのも、これは事実上の賛辞だったからである。彼は黙って頭を下げ、急いで帰宅した。翌日彼は次のような手紙を郵便で受け取った。

幼い子に与えられた迅速で寛大な救助に対して、オズボーン様に心からの謝意を表明いたします。オズボーン様のお散歩がこのような形で中断されたことを申し訳なく思い、貴殿のご好意に対して私どもの方で失礼な振る舞いがなかったことを望んでおります。

手紙と一緒にオズボーンの名前が縫い込まれたポケットチーフが同封されていた。それは、涙を拭くように彼が少年に持たせたものだった。もちろん、手紙に対する彼の返信は短いものだった。

大したことではございませんので、ご子息様への私の行為が誇張されないことを望みます。僭越ながら、ウィルクス様が痛ましい経験からご回復され、お元気でられますことを心からお祈り申し上げます。

当然、これ以上のやり取りが行われるはずはなく、そのあとの数日間、コングリーブ嬢の動向について新しい情報がもたらされることはなかった。オズボーンは今や彼女に会い、平凡な若い女性——もちろん、賢い（少なくともそう見えた）感じのいい女性——だということが分かった。礼儀作法を気遣い、少し悲しそうでさえある無邪気な顔をした単なる若い女性に過ぎなかった。自然と芸術への熱意のために波のなすがままにしようが、最後にはしかるべきやさしさとキスで慰めることになる小さな愛らしい子どもが二人いることが分かった。子どもたちは彼女のことを「叔母さん」と呼んだ。このような状況でコングリーブ嬢に会ったので、

良心に対する彼の任務の負担は軽くなったように感じられた。理屈の上では彼女は不愉快だった。しかし現実には、もし彼女のことを嫌うつもりがなければ、彼女に好意を抱くのはとても楽しいことであっただろう。彼の見解によると、肉体と血の偶然の出会いによって彼女は親しい存在になったのである。オズボーンは自らの怒りを決してあきらめるつもりはなかった。彼の記憶の中で、気の毒なグラハムの亡霊は陰しい表情でまっすぐ座り、明滅する炎に力を与えていた。しかし、復讐の対象である女性と、砂浜でのちょっとした事件の女性とを和解させ、害のない女性を報復の色に染めるのは少し困難な仕事であった。いろんな事が次から次へと起こり、計画を実行に移すことができず彼はむしろ上機嫌だった。彼はいろんなところから招待を受け、ぶらぶらと時を過ごしては海水浴をしたり、おしゃべりをしたり煙草を楽しんだり、乗馬に出かけたり外で食事をしたりして、際限なく新しい人に会い、表向きの服装は快活な半喪服に変えてしまった。しかしこういったことをしていても、グラハムに対して不誠実な気持ちにはならなかった。奇妙なことだが、グラハムが死んでしまった今ほど、こんなにも彼が生きているように感じられることはなかった。肉体をともなっているとき、彼には半分の生命力しかなかった。グラハムの精神は非常にやる気にあふれていた。しかし、肉体は致命的に脆弱だった。彼は困惑しがっかりしていた。元気で活発だったのは気持ちであり、愛情であり、思いやりであり、理解力だった。オズボーンには、それらを唯一受け継ぐのは自分であることが分かっていた。遺産の大きさに対する健全な感覚で胸が一杯になるのを彼は感じていた。そして、グラハムを暗い片隅に呼び出し、寂しい場所で彼の死を悼む気持ちが日に日に薄れていくことを意識していた。取り消すことのできない厳粛なたった一つの切望をもって、自分の屈強な身体と活発な精神を友人の美德の命ずるがままにしておいた。自分の旅行が休暇へと変化することを感じながら、彼は長い手足を伸ばし、かすかにあくびをしながらアーメンとつぶやいた。

コングリーブ嬢に出会って一週間も経たない頃、世間の評判が大変高い婦人の家で催される私的な芝居を友人と観にいった。その日は二つの演目が予定されていたが、一つ目の芝居があまりにも退屈でつまらなかったのも、このままではその日がつまらないまま終わってしまうと思い、カーテンが降りたときオズボーンは脱出しようとした。客間の壁と座席の間の狭い通路をとおり抜けようとしたとき、女性の手に触れて、その手からパンフレットを落としてしまった。パンフレットを拾い上げようとかがむと、二つ目の芝居の出演者の中にコングリーブ嬢の名前を見つけた。彼はすぐに席に戻った。開始の曲が流れ、カーテンが再び上がった。出演者が何人か十八世紀のメイクと衣装を身につけて舞台に登場した。最後に、完璧なメイクと衣装に身をくるんだ主人公であるコングリーブ嬢が大きな歓声の中で登場した。非常に興味深い苦境にいる若い未亡人の伯爵夫人役だった。演出上のさまざまな工夫にもかかわらず、彼女は大変美しかった。衣装の着こなしやメイク・小道具の技術は素晴らしく、センスも非常に良かった。彼女はまるで、フランスの宮殿に飾られているルイ十五世時代の美しいパステル画法の全

身像から抜け出てきたかのようにだった。しかし、彼女は美しく上品で洗練されているというだけでなく、威厳と厳しさがあり、ときに深刻な表情を浮かべ、顔をしかめたり指導力を発揮したりした。そして、それに相応しい場面では真実の涙を流すのであった。コングリーブ嬢が本物の役者であることは明らかだった。こんなに素晴らしい演技をオズボーンは観たことがなかった——実に素晴らしかった。というのも、完全な若い女性であると同時に劇的な効果とともに完璧な婦人を演じる女優がそこにいたからである。観客の熱狂は頂点に達し、他の出演者たちは為すすべもなく片隅に追いやられていた。女性の準主役を演じた美しいラティマー嬢——彼女は社交界でその美しい容姿を賞賛されていたのだが——の自慢の容姿も影が薄く見えた。芝居のポスターには、「今回の上演のために特別に」フランスのものを脚色したと明記されていた。最後にカーテンが降りたとき、観客の気持ちが盛り上がり、脚本家に出てくるよう要求した。彼らの要求に気づくまでにしばらく時間が経過したので、それを彼らの好奇心に対する挑発だと観客は解釈した。ついに、一人の男性がカーテンの前に進み出て、彼の仲間が上演する栄誉を得た本日の作品は、皆さまからの賞賛を得た主人公の役を演じた若い女性の手によるものだと公表した。この発表に対して、十人ばかりの客が声を上げ、コングリーブ嬢はもう一度出てくるべきだと要求した。しかしその男性は、彼女はすでに家を離れたと言ってこの要求を断った。しかし、これが事実でないことをオズボーンはあとで知った。ヘンリエッタは舞台の後ろで、大きな花束を指でなで、ソファに座って馬車を待ちながら、疲れた笑みとともに賞賛の声を聞いていた。それは、母親のそばでアイスクリームを食べながら座っているラティマー嬢にとっては面白くないことだった。ラティマー嬢の母親は、恐ろしくやせた地味なコングリーブ嬢を非常に陰しい表情で見ている。

興奮したオズボーンはぞくぞくしながら徒歩で帰宅したが、明らかに当惑していた。彼はまるで大事な点を見落として結論を出していたかのように感じた。また、グラハムの気まぐれな彼女は何ら非難されるべき女性ではないように思われた。彼女をどのように考えればいいのかまったく分からなくなっていた。彼女は男性の気持ちを傷つけ知らないふりをした。何をするにせよ、彼女はそこに非凡な才能の跡を残した。男ぐせは悪いが、音楽家であり、芸術家であり、女優であり、作家でもあった——ある意味で天才であった。彼女は自分の心の問題をどう処理したのだろうか？メイクをし、照明と花束の中で大勢の人の拍手に合わせて浮かれている一方で、気の毒なグラハムは永遠の静寂の中に閉じ込められているのである。オズボーンの気持ちは刺激された。あの深く魅力的な目に後悔の涙を流させるのはまさに分別ある男の仕事である。

芝居が上演されたのは水曜日だった。その週の土曜日、オズボーンはカーペンター夫人主催のピクニックに参加するよう招待された。観劇会を企画したのもカーペンター夫人で、彼女はパーティを企画するのが大好きだった。今回夫人が参加を依頼した人たちは海を船に乗って進み、ピクニックのために自然が確保してくれたのどかな場所に到着したら、芝生の上で昼食をとり、踊ったりゲームをしたりすることになっていた。彼らは二隻の大きなヨットに乗り込ん

だ。ヨットに乗っている間、オズボーンはカーペンター夫人としばらく話しをして、夫人が好感の持てる話し好きな女性だということと知った。夫人と一緒に船の一番端に場所を取ったオズボーンは、青色の厚いベールで顔を覆った白いドレスの女性を観察していた。彼の方を向いたベールから、美しい二つの黒い目がじっと彼の方を見つめていることに気がついた。一瞬、その目の持ち主を認識するのにとまどったが、そのとまどいはすぐに消滅した。

「ああ、コングリーブ嬢も参加しているのですね」と彼はカーペンター夫人に言った。「先日女優です」

「ええ。参加するよう説得したのです。水曜日以来、彼女は大スターですからね」とカーペンター夫人は言った。

「彼女はあまりその気じゃなかったんですか？」とオズボーンは尋ねた。

「ええ、始めはそうでした。お分かりでしょう。彼女はお行儀の良いおとなしい子なのです。あまり周囲ではやし立てられるのを好まないのです」

「先日、十分はやし立てられましたからね。彼女は素晴らしい才能の持ち主だ」

「申し分ありませんわ。彼女がどこでそれを身につけたのか誰も知らないのです。彼女のご家族をご存じ？ まったく現実的で、ロマンティックなところはかけらもなく、世界で最も想像力に乏しい人たちだわ—— 道徳的な理由で劇場にも行かないような人たちなのよ」

「なるほど。彼らが芝居に行かなくても、芝居の方からやってくるってわけだ」

「そのとおり。いい気味だわ。ウィルクス夫人はヘンリエッタの姉さんだけど、彼女がお芝居をするっていうんで、ひどく苛々していたの。それが今では、ヘンリエッタの成功以来、町中でそのことを話してるのよ」

ヨットが岸に着くと、ご婦人たちのために船首から近くの岩に一枚板がかけられた。オズボーンは板の端に立ち、ご婦人たちに手を貸していた。カーペンター夫人がコングリーブ嬢と最後にやってきた。彼女はオズボーンの手を断ったが、ベールをとおしてかすかに会釈をした。半時間後、オズボーンは再びカーペンター夫人の隣にいて、再びコングリーブ嬢のことを話していた。若い女性たちのグループに混じって近くに彼女がいるわとカーペンター夫人は注意した。

「彼女が婚約しているとか、あるいは婚約していたとか、聞いたことはありませんか？」と彼は声を低くして尋ねた。

「ありませんわ。聞いたことがありません。誰とですか？ —— そう言えば、今年の夏シャロンで何か聞いたことがあるような気がしますわ。彼女が誰か男の人となれなれしくしているとか何とか。名前は忘れてしまいましたけれど」と夫人は言った。

「ホーランドでしたか？」

「そうではないと思います。彼はあの愚かなドッド夫人のために彼女のもとを去ったのです。ドッド夫人はご主人をなくしてから半年も経っていなかったのよ。男性の名前はグラハムだったと思います」

オズボーンが突然激しく大声で笑い出したので、カーペンター夫人は驚いて彼の方を振り向いた。「失礼。しかし、それは間違いだと思います」と彼は言った。

「オズボーンさん、あなたがお尋ねになったのよ。でも、コングリーブさんのことは私よりよくご存じのようね」と夫人は言った。

「ありそうなことですね。ええ、僕はロバート・グラハムを知っています」オズボーンの言葉がよく響く強い声で発せられたので、そばにいるグループの二、三人の女性が振り向いて彼を見た。

「彼女に聞こえたわ」とカーペンター夫人が言った。

「でも、振り向きませんでしたけど」とオズボーンは言った。

「だから私の言ったことが正しいのよ。あなたをご紹介しますと思いましたが、これできなくなりましたわ」

「それはどうも。では、自分でやってみます」とオズボーンは言った。彼は忘れていた怒りの熱を胸の中感じていた。この邪悪な冷たい女性は、グラハムを惨めな自己破滅に追い込んだだけでは満足せず、その自己破滅が、恥ずべき行為に対する自責の念によって生じたことだと人々に思わせていた。オズボーンは自らの怒りが治まらないうちに攻める決心をした。しかし、彼は復讐者ではあったけれども、紳士であることに変わりはなく、非常に好意的な雰囲気ですの女性に近づいた。

彼は帽子を取りながら言った。「もし間違っておりませんでしたら、私のことをお見知りおいていただいているという栄誉を賜っていると思うのですが」

ヨットを降りるときのコングリーブ嬢の会釈は、明らかに彼のことを認識したことを示していると思ったので、この挨拶をしたときの彼女のよそよそしい笑顔に彼は驚いた。この短い間に彼女の気持ちを変える何かが起こったに違いない。彼がグラハムの名前を口にしたとき、彼女がそれを耳にしたこと以外にその理由は思いつかなかった。

「以前にお会いしたことがあるような気がしますが、残念ながらどこだったか思い出せません」と彼女は言った。

オズボーンは彼女を一瞬見つめて言った。「ウィルクス君がお元気かどうかお尋ねする喜びを自らに禁ずることができません」

「思い出しましたわ」とコングリーブ嬢は簡単に答えた。「甥を海で溺れるところから助けて下さいましたわね」

「怖い思いをしたことをお忘れになっているといいのですが」

「彼は怖い思いなどしなかったと言っています。もちろん、私は彼の言うことに反論しませんわ。その方が私のためですから」

コングリーブ嬢のこの言葉のあとに長い沈黙が続いたが、彼女はまったく気まずく思っていないようだった。彼女の見かけ上の落ち着き——もっとひどい言い方があるかもしれないが——にオズボーンはうろたえた。もし彼女がグラハムの死のことをやましく思っており、オズボーンの口から彼の名前が出たときに、彼がグラハムがよく話していた親友だと気づいたことを考えると、確かに彼女は勇気ある表情を保っていた。しかし、彼女は本当にグラハムの死のことを聞いたのだろうか？しばらくの間、オズボーンはそのことについて好意的に解釈した。自分がその知らせを伝える者になることで、やっと肩の荷が降りるような気がした。話の内容が内容なので、オズボーンは、コングリーブ嬢を周囲の人から引き離す必要があると考えた。したがって、彼女と話していた人たちが各々いろんなグループに分かれ始めたとき、「少し歩きませんか」とオズボーンはコングリーブ嬢を誘った。彼女は誰か一人ついてきてくれないか探すように女性たちを見まわしたが、一緒に来てくれそうな人はいなかった。オズボーンの提案にしたがって、あまり気乗りのしない表情でコングリーブ嬢はゆっくりと歩き始めた。先日の彼女の演技に対してオズボーンは非常に心のこもった賛辞を述べた。彼の本当の心うちを考えると、これほど見当違いな発言はなかったが、仕方がなかった。性格の悪い女性という意味では、彼女はどこにでもいる女性だったかもしれないが、彼女の演技は完璧だった。公平を期すために少し彼女に敬意を表したあと、彼はグラハムのことに触れた。

「コングリーブさん、あなたに初めてお会いしたような感じがしないのです」と彼は言った。「あなたが話題になっているのをよく耳にしました」しかし、読者の皆さんは覚えておられるだろうが、これは必ずしも真実ではなかった。彼が知り得たことはすべて、ドッド夫人との三十分のおしゃべりの間に得られたことだった。

「どなたのお話を耳にしましたの？」とヘンリエッタは尋ねた。

「ロバート・グラハムです」

「やっぱり。あなたが彼の名前を持ち出すのではないかと半ば覚悟していたのです。彼があなたの名前を口にしたことを覚えています」

オズボーンはとまどった。グラハムのことを知っているのだろうか、知らないのだろうか？「あなたもグラハムのことをよくご存じなのではないですか」と、彼はいくぶん先制を期すように言った。

「彼が話してくれる範囲内ですけれども——彼のことをよく知っている人がいるとは思えませんわ」

「それでは、彼が亡くなったことはご存じなのですね」とオズボーンは言った。

「ええ、彼自身から」

「どうして彼自身から知ることができるのですか？」

「お亡くなりになる直前、手紙を下されたのです。はっきりと宣言するというよりは、最期のときに訪れることが読み取れるような内容でした。私は、もし誰も取りにこなければ、私のと

ころに戻すように郵便局にお願いして返事を書きました。それは一週間以内に戻ってきました——ところで、オズボーンさん」とその若い女性は続けた。「一つお願いがあるのです」

オズボーンは黙って聞いていた。

「もうこれ以上グラハムさんのことについては触れないでいただければ、とてもありがたいのですけれど」

これはオズボーンが予期しなかった一撃だった。しかし少なくとも、そこには直截という美德はあった。オズボーンはその女性を見た。頬がかすかに赤くなり、目が真剣に光った。明らかに彼女の願いには力が込められていた。彼は作戦を一旦中止し、また別の角度から近づかなければならないと感じた。彼女の求めに応じるまでに少し時間がかかった。答えを待ちながら、彼女は彼を見つめていた。彼女の暗い目を顔に感じた。

「どうぞお好きのように」と、とうとう彼は機械的に答えた。

彼らはしばらく黙って歩いていた。すると突然、カーペンター夫人が補佐役として遣わした若い既婚の女性に出会った。コングリーブ嬢は何かちょっとしたことを口実にオズボーンに別れを告げ、この女性と話しを始めた。オズボーンはぶらぶらと一時間ほど一人で歩き回っていた。予測しなかった出来事に遭遇しつまずいたけれども、さらに前進するだけだと彼は決意した。オズボーンが水辺をぶらついている半時間の間に、コングリーブ嬢の頭上を覆う不吉な黒い雲は二倍に膨れ上がっていた。事実、オズボーンの中から見て、あの若い女性のお願いほど不謹慎で冷淡な頼み事などあり得るだろうか？

そうこうしているうちに、彼はカーペンター夫人から課せられていた義務を怠っていることを思い出した。彼は来た道を引き返し、パーティが催されている場所に戻った。カーペンター夫人はオズボーンを呼び、「一時間も探していたのよ」と言った。彼が何をしていたのかを知ったとき、「何て人なの！」と言って日傘で彼をたたき、もう二度とお誘いしないからと宣言した。それから彼女はまだ未熟なところのある姪にオズボーンを紹介した。彼はその女性と歩いていき、水辺を見下ろせるところに座った。二人には共通の話題がほとんどなかった。オズボーンはコングリーブ嬢のことを考えていた。カーペンター夫人の姪は、人がよく言うように社交界にまだ片足を入ただけで、とても内気でそわそわしていた。オズボーンのような背の高い男前の大人の男性と二人きりでいることにどきどきしてとまどっていた。そこでオズボーンは、彼女が喜ぶだろうと思って、水の上を跳ねるように小石を投げて、少し彼女に自信を持たせようとした。それでも、オズボーンはまだヘンリエッタ・コングリーブのことを考えていた。そこで彼はカーペンター夫人の姪にヘンリエッタのことを知っているか尋ねてみることを思いついた。彼女は、まったく知らないわけではないと答えた。しかし、コングリーブ嬢について新しいことは何も分からなかった。明らかに彼女は物事を分析するというタイプではなかったし、うわさ話をするにはあまりにも未熟だった。ヘンリエッタはとても頭が良くて、ラテン語やギリシャ語を読まれるそうですわ、というのがカーペンター夫人の姪が口にしたすべてだった。

「頭が良い、頭が良い。彼女についてそれ以外のことを耳にしたことがないよ。彼女は悪魔じゃないかと思い始めているところだ」と彼は言った。

「そんなことはありませんわ。コングリーブさんはとても良い方だわ」と彼の同行者は言った。

「とても信仰心の篤い方で、貧しい人のところへ訪ねていたり、教会で説教を読まれたりしています。先日、コングリーブさんが貧しい方たちのためにお芝居をされたことをご存じでしょう。あの方が悪魔だなんてことはあり得ませんわ。とても素晴らしい方だと思います」

しばらくして昼食の時間になった。姿が見えなくなっていたカップルが姿を現し、誰も入っていけるとは思わなかった岩陰——もっと驚いたのは、そこに入っていくのに手を貸した男性に誰も気づかなかった——から出てくる女性たちに男性たちが手を貸していた。

芝生の上の木陰にテーブルが置かれ、ひざかけやショールの上にみんな座った。カーペンター夫人の姪の横に場所を取ったとき、コングリーブ嬢がまだ姿を見せていないことにオズボーンは気がついた。カーペンター夫人にそのことを指摘すると、「最後に彼女を見たとき、彼女はストーン氏（その男性のことをオズボーンは聞いたことがなかった）と一緒にいたけれど、すぐに戻ってくると思うわ」と言った。

「コングリーブさんは大丈夫だわ」とカーペンター夫人の姪が——知ってか知らずかオズボーンには分からなかった——言った。「だって、牧師さんと一緒なんですもの」

しばらくすると、姿の見えなかった二人が近くの丘の頂上に姿を現した。二人が降りてくるのをオズボーンは観察していた。ストーン氏は上品な顔つきの若い男性で、牧師がよく身につけているネクタイと聖職者的なデザインが誇張された上着を着ていた——明らかに、強い「儀式的な」偏重を感じさせる聖職者だった。青ざめた重々しい顔つきでおしとやかにコングリーブ嬢は近づいてきた。その間、体の動きや視線の移動を一つも見逃すまいと、オズボーンは彼女をじっと見つめていた。彼女は流行りの短い白のモスリンと黄色のリボン飾りがついたスカートを身につけ、後ろに大きな結び目のある厚手の黒いレースのショールを胸の上で交差させ肩にかけていた。手には摘み取った野生の花を一杯持っていた。オズボーンの隣にいる女性がそれを見て、手袋は「台無しになったに違いないわ」とささやいた。彼女が牧師と出かけたことには何か意味があるのだろうか？とオズボーンは考えた。遅れてやってきた後悔の念に突然さいなまれ、精神的な慰めを得るために行動を起こしたのだろうか？教会のだて男の表情にもコングリーブ嬢の表情にも、敬虔な話し合いがもたれたことを示すような痕跡は見られなかった。それどころか、ストーン氏はひどく悲しそうな表情をしているように見えた。二人の会話はひどく世俗的な内容だったのだ。牧師の白いネクタイにはいつものような厳格さがなく、彼の帽子は冷静な落ち着きを失っていた。何よりもひどいのは、ボタン穴に小さな青いワスレナグサが差してあったことだ。コングリーブ嬢の方は、半分深刻そうなあのいつもの表情をしていたが、恋人の幽霊を見たという気配はどこにも見られなかった。

オズボーンは彼のそばにいる退屈な女性に対して機械的に思いやりのあるふりをした。しか

し、頭はCongree嬢のことでいっぱい、目は絶えず彼女の顔を見ていた。ときどき彼女と視線の合うときがあった。激しい嫌悪感がふつふつと胸にわき起こった。ヘンリエッタ・Congreeに必要なのは、彼女が他人を利用したのと同じように彼女も人に利用されることだと彼は独り言を言った。明らかに今牧師を利用しているのと同じように。水流の中ほどで空しく底を手探りしながら、耳まですっぽり彼は恋に落ちていた。その間、乾いた靴を履いたまま彼女は水辺に座っているのだった。彼女は教訓を学ぶ必要があった。しかし、誰がそれを彼女に与えることができるだろうか？彼女のすべての師が知っている以上のことを彼女は知っているのだ。男性は彼女に近づき、魅了され虜になるだけだった。もし彼女が、自分と同じほど明晰な頭脳、活発な想像力、不屈の意志を持つ者、あるいは師と仰ぐ者に会いさえすれば！テーブルをひっくり返し、彼女の出先をくじき、彼女を虜にし、そして突然時計を見て別れの挨拶をする、そんな男性に会いさえすれば！そうすれば恐らくグラハムも安心して眠りにつくことができるだろう。人の心をもてあそぶということがどういうことか彼女にも分かるであろう。というのも、彼女の心は、まるでブロンズに対するガラスのようなものだからである。オズボーンはテーブルを見まわした。しかし、カーペンター夫人の招待客には、彼が心に描く——ブロンズの心と水晶の頭を持つ——英雄にほんのわずかでも似ている男性はいなかった。彼らはまさに、若い女性をそばにはべらせるのが似合う若者たちに過ぎなかった。しかし、ヘンリエッタ・Congreeはそのような女性の一人ではなかった。彼女は舞踏会にいる単に軽薄な女性ではなかった。彼女のしぐさにはどこか真剣で高貴な何かがあった。それは知的な喜びであった。誠実な男性の心を最後の一滴まで飲み干し、恐ろしい食品に白い花を咲かせるのだった。オズボーンが辺りを見わたすと、周囲の人の存在、サンドウィッチやシャンパンのことを一瞬忘れてしまったかのように見える若い女性に目がとまった。彼が彼女のことを見ているのに気がつくと、もちろん、その女性はすぐに目の前の皿に視線を落とした。しかしオズボーンは彼女の視線の意味を読み取った。それ——まだ清純さの残る乙女の視線——は、容易に翻訳できる言葉で、「あなたこそ私が探し求めていた男性です！」と語っているように思われた。つまり簡単に言うと、オズボーンさん、あなたは何て素敵な方なのでしょう、ということである。オズボーンは脈が速くなるのを感じた。彼の計画は始まったのだ。彼の際立った容姿がCongree嬢の心を傷つけるのに十分な装備だというわけではなかったが、少なくともそれは彼の任務を外に向かって表現するものだった。

とうとう昼食が終了した。一行に同行していたバイオリン弾きが楽器のチューニングを始め、カーペンター夫人がダンスの準備を始めた。食事の残骸は片づけられ、水平な場所が確保されると、そこは舞踏場へと変化した。ダンスが得意なわけではないオズボーンは、他の二、三人の見物人と少し離れたところに座った。その中の一人がストーン牧師だった。そこにいた男性の誰もがヘンリエッタ・Congreeの動きをじっと見つめていた。しかしオズボーンは、となりにいるストーン氏をちらちらと眺めていた。彼はCongree嬢にあまりにも気を取られ

過ぎて、他のことは何も考えられないようだった。

「とてもチャーミングだね。この女性たちのことだけど」と、たった今紹介されたばかりの若い牧師に彼は話しかけた。ダンスが特に上手な娘もいるね」

「そうですね！」とストーン氏は力を込めて言った。それから彼は、自分の服装にふさわしくない見識を不当に表してしまったことを恐れるかのように言った。「みんな上手だと思います」

しかし、法律家であるオズボーンは、当然、牧師であるストーン氏とは違った見方をしていた。「明らかに他の人より上手な娘さんがいるそうですね。こんなに違いがでるものだとは知りませんでした。たとえば、コングリーブ嬢をご覧ください」

コングリーブ嬢に目が釘づけになっていたストーン氏は、オズボーンの指摘に応じて、彼女のそばで踊っている足もとの少しもたもたした体格のよい女性に視線を移した。「そうですね。彼女はとても上品でおしとやかで、とても軽やかで自由ですね！」とわざとらしく言った。

オズボーンは微笑んで独り言を言った。「君もまぬけな男だね。君の仇もとってあげよう」そして、声に出して次のように言った。「コングリーブ嬢は本当に大した女性です」

「そのとおりです！」

「彼女の才能は非常に多岐にわたりますね」

「本当にそうです」

「彼女の芝居をご覧くださいになりましたか？」

「ええ。その種の娯楽に関する禁を破り、その日、観に行きました。素晴らしい演技でした」

「では、彼女があのお芝居の脚本を書いたこともご存じなのですね」

「ああ、そういうわけでもありません」とストーン氏は少し反論するような身振りとともに答えた。「彼女は翻訳をただけなのです」

「ええ。でも彼女はあれをすっかり書き直さなきゃならなかったのです。あの芝居のフランス語版をご存じですか？」と言って、オズボーンは原題を口にした。

ストーン氏はその作品を知らないことを態度で示した。

「原作のままでは決して演じることはできなかったでしょう。私はそれをパリで観たことがあるんです。コングリーブさんはすばらしい才能でその難しい場面を削除したのです」

ストーン氏は黙っていた。バイオリン弾きが長く引き伸ばした音を奏で、女性たちは相手の男性に低くお辞儀をした。コングリーブ嬢の相手の男性はこちらに背中を向けて立っていた。したがって、二人の男性は彼女のお辞儀を真正面から見ることができた。もしストーン氏の熱意がオズボーンの不敬な振る舞いに水を差されていたとしても、この光景によって再び火がついた。「彼女が歌うのを聴きになったことがあるでしょう」としばらくしてストーン氏が言った。

「ええ、あります」とオズボーンはためらわずに答えた。

「彼女は聖歌を本当に美しい気持ちを込めて歌うのです」

「ええ、そのように伺っています。それだけではなくて、彼女は非常に教養があるとも聞いています——読書に対して情熱をお持ちのようです」

「そうだと思います。実際、彼女は神学の専門家なのです。今朝、私たちは大変活発な議論をしました」

「ということは、あなたが反論をしたということですね？」とオズボーンが言った。

「いいえ。私が反論したのではなく、彼女が反論したのです」と、愛嬌のある単純さでストーン氏が答えた。

「彼女は少しばかり——ほんの少しですが——」とオズボーンは口ごもり言葉を選んだ。

「少しばかり？」と、ストーン氏が好意的な調子で尋ねた。

オズボーンはまだ躊躇していた——「少し異端的とおっしゃりたいのですか？」

「少しばかり品が無いとでも言うのでしょうか？」

「ああ、オズボーンさん！」と若い牧師は叫んだ——「それはCongregational嬢には最も相応しくない言葉です」

そのとき、カーペンター夫人が近くに寄ってきた。「Congregational嬢には何が最も相応しくないとおっしゃるの？」と、牧師の発言が聞こえたので彼女は尋ねた。

「『品が無い』ですよ」

「それは私が彼女のことを考えるときに初めに思い浮かぶ言葉ですけど。それはお認めになるでしょう。いつもそうして下さいますものね。本当のことを言っちゃいましたので、今度は誉めてあげるべきだと思いますわ」

「ああ、カーペンター夫人！」とストーン氏は言った。

「ええ、ストーンさん。彼女はおとなしいのですが、神秘的なところがあります——オズボーンさんはお気づきになっていると思いますが」とカーペンター夫人は話しを続けた。

「神秘的——私が言いたかったのはそういうことです」ストーン氏は少し態度を軟化させて言った——「オズボーンさん、何をご存じなのですか？」

オズボーンは牧師の表情が青ざめているように見えた。確かに重々しそうな表情をしていた。

「ああ、僕は何も知りません。何も確かめたわけではないのです。ただ、尋ねてみただけです」

「そういうことでしたら」と、強い感情でその率直な顔を赤くして牧師は答えた。

——「私は断言します。今日の集まりの中で、Congregational嬢は最も教養があり、最も高貴な志を持ち、最も誠実で、最も篤い信仰心を持った真実のキリスト教徒である、と」

「あなたがおっしゃったことを心から感謝します」とオズボーンは言った。「それを信じて忘れないようにします」

ストーン氏をお人よしで女好きな牧師——典型的なタイプ——と考えることは、オズボーンにとってそんなに困難なことではなかっただろう。それとは対照的に、カーペンター夫人は抜

け目のない賢い女性だった。しかしどういうわけか、オズボーンは牧師の言葉に心を動かされ、カーペンター夫人の言葉には何も感じなかった。ついにダンスに飽きた者が何人か踊りの集団から離れ、水辺に戻っていった。午後の時間も終わりに近づき、西の空が赤く染まり始め、芝生の上の影も長くなり始めた。ニューポートに向かって出発する時間まであと三十分だった。オズボーンはこの機会を利用しようと決心した。彼はCongree嬢のあとについて、水の上に突き出たごつごつした岩棚まで来た。Congree嬢と二人の婦人はそこに夕日を見にきていた。オズボーンとCongree嬢が二人の婦人から距離を置くのは難しいことではなかった。熱心で敏感な彼女の表情に不信感は見られなかった。もし彼女に挑戦的な気持ちがあったとしたら驚くべきことであっただろう。しかし、彼女の落ち着きと平静さにオズボーンは妙に苛々した。彼にはそれが究極の傲慢さであるように感じられた。彼は胸ポケットからダーズばかりの書類がはさまれた小さなファイルを取り出した。その中にはグラハムからの最後の手紙が含まれていた。

「ロバート・グラハムについて今朝あなたから私に課せられた約束を一度だけ破らせて下さい。ここにあなたに見てもらいたい手紙が一通あります」と彼は言った。

「グラハムさんご自身からですか？」

「彼自身からのものです——亡くなる直前のものです」彼はそれを差し出したが、ヘンリエッタはそれを手にしようとはしなかった。

「私はあなたのお手紙を見ることを拒否しないつもりですが」

「あなたにそれをお見せすることはできません。私はすぐにそれを捨ててしまいましたの」

「ええ、しかし私はとっておいたのです——そんなに長くありません」とオズボーンは食い下がった。

Congree嬢はまるで恐ろしく努力がいるかのように手を伸ばしそれを受け取った。彼女はしばらく宛名を見つめたあと、視線をオズボーンに向けた。「これは大事なものですか？この中にはあなたがとっておきたいと思うものがありますか？」と彼女は尋ねた。

「いいえ。はっきり言えば、それはあなたのものです」

「それなら！」とヘンリエッタは言って、手紙を二回破って紙切れを海の中に投げ捨てた。

「ああ！」とオズボーンは叫んだ。「何をしますのです？」

「怒らないで下さい」とヘンリエッタは言った。「それを読むつもりはまったくないのです。私との約束を守って下さらなかったのが当然です」

彼はぐっと怒りを飲み込み、彼女のあとについて行った。

III

九月の中頃、ドッド夫人が友人に招待されてニューポートを訪れた。社交シーズンが終わり

かけに招待されたことにいくらか腹を立てていた。しかし、全体としては以前のドッド夫人と変わりにはなかった。というより、まったくいつもと同じだった。というのも、夫人も夫人なりにグラハムの死にとっても胸を痛めていたからだ。彼女が到着して二日後、彼女は通りでオズボーンに会い、彼を引き止めた。「まだここに誰かいてよかったわ」と彼女は言った。というのも、彼女は友人と一緒におり、オズボーンをその女性に紹介していたので、是非彼女に会いにくるよう懇願した。そこで、二日後オズボーンが彼女を訪ねていくとドッド夫人は一人だった。ドッド夫人はグラハムのことを話し始めた。彼女はとても感情的になり、少しでもオズボーンがやさしい言葉をかけていたら涙を流したに違いない。しかし、彼女の悲しみになぜかオズボーンは同意する気になれず、短く返答しただけだった。ドッド夫人は涙もろくて愚かでひどく感傷的だという印象を彼に与えた。グラハムが彼女に好意を寄せていたといううわさにはわずかも真実が含まれているのだろうかと思った。ヘンリエッタ・コングリーブへの情熱の話にいかばかりかの真実があるのなら、そんなことはあり得るはずがなかった。彼が二人の女性に好意を持つことなどあり得なかった。オズボーンはそう考えたが、ドッド夫人が著しく彼の気を引くことに失敗したとは思わなかった。なぜなら、この三週間、彼はヘンリエッタといることを常に楽しんだからである。

もちろん、ドッド夫人にとって、グラハムからコングリーブ嬢に話題を移すのは難しいことではなかった。「コングリーブ嬢はまだこちらにいらっしゃるとお伺いしましたけれど。彼女とお知り合いになれて？」と夫人は尋ねた。

「ええ、申し分なく」とオズボーンは言った。

「ずいぶんと簡単におっしゃるのね。少しでも彼女が自分のしたことに気づいてくれたのならよいのですが。オズボーンさん、あなたにはおやりにならなければならないことがありますよ。彼女を悔悛させるべきです」

「彼女を悔悛させようとは思いませんでした。私は彼女をそのまま受け止めたのです」

「グラハムさんのために彼女は喪服を着てらして？最低でもそれくらいのことはしてさし上げられると思いますけれど」

「喪服を着るですって？二日に一回はパーティに参加していましたよ」

「もちろん、彼女が黒い服を着ているとは思いません。しかし、心で喪に服してらっしゃらないのですか？」そう言ってドッド夫人は胸に手をあてた。

「彼女の心の中でという意味ですか？それ以前に、彼女に心があるのかどうかの問題です」

「自殺には否定的だったでしょうね」と、少しとげとげしく微笑んで彼女は言った。「残念ですが、私も同感です」

「僕だってそうですよ、ドッドさん」とオズボーンは言った。それから一瞬ものの思いに沈んだ。「グラハムがここにいればどんなにかよかったのに！」オズボーンは叫んだ。「彼とコングリーブ嬢はもう一度理解しえたかもしれないとときどき思うのです」

ドッド夫人は恐ろしさのあまり両手を投げ出した。「どういうこと？彼女は最後の恋人をあきらめたのですか？」

「最後の恋人？誰のことをおっしゃってるのです？」

「誰って、あなたにお話しした方です——ホーランドさんですよ」

ドッド夫人の話の要点をオズボーンはまったく忘れてしまっているように見えた。彼は突然大きな声で神経質そうに笑った。「ああ、そうだったんですか！」と彼は叫んだ。そして、落ち着きを取り戻すとはっきりと次のように言った。「ホーランドさんでしたっけ——名前はともかくとして——その方はこの三週間コングリーブ嬢とは会っていません」

ドッド夫人は視線を落として黙って座っていた。ついに顔を上げると次のように言った。「ということは、あなたは彼女によく会っていらしたってことね」

「ええ、僕は頻繁に会ってましたよ」

ドッド夫人は眉を上げ微笑むように唇を伸ばしたが、明らかにそれは笑みではなかった。「オズボーンさん、変なことを聞くようですが」と彼女は言った。「コングリーブさんとそんなに親しくしてらして、それとグラハムさんとの友情をどのように折り合いをつけていらっしゃるわけ？」

オズボーンは顔をしかめたが、それは礼に適ったという程度をかなり逸脱していた。言うまでもなく、ドッド夫人は極めて愚かだった。「ああ」オズボーンは答えた。「その二つは申し分なく折り合いをつけることができますよ。それにドッドさん、失礼かもしれませんが、あなたには関係のないことです。いずれにせよ」彼はより穏やかに続けた。「恐らく近いうちに謎は解けるでしょう」

「ああ、もしそれが謎でしたら」その女性は叫んだ。「私はその謎をうまく解けるように思います」

オズボーンは帰ろうとして立ち上がった。ドッド夫人は手を膝の上に組んでソファにもたれ、胸の内を見透かすような笑みで彼を見上げた。彼女はとがめるように彼に向けて指を振った。オズボーンは夫人が何か考えていることが分かった。恐らくその考えは正しかった。とにかく彼の顔は赤くなった。それを見て夫人は叫んだ。

「やっぱり思ったとおりね」と彼女は言った。「ああ、オズボーンさん！」

「何を考えているんです？」一体なぜ自分は顔を赤くしたのか分からずにオズボーンは尋ねた。

「もし私の考えていることが正しければ、それはチャーミングな思いつきだわ」とドッド夫人は言った。「男を上げるというもののね。とてもロマンティックだわ。小説のようにね」

「何のことをおっしゃっているのか分かっているとは言い難いのですが」

「いいえ、あなたは分かっておられるわ。幸運を祈りますよ。別の方にならそれは危険なゲームだと申し上げるでしょうが、あなたには！」——何かをほのめかすかのような頭の動きとと

もに、ドッド夫人は、オズボーンの美しい体格の高さや肩の幅を測った。

オズボーンはひどく胸が悪くなり、それ以上ぐずぐずせずその場を立ち去った。読者の皆さんは、オズボーンが三週間前ならとても素晴らしい思いつきだと考えたであろう計画を、他人にはのめかされて不愉快になった原因をどう理解すればいいかお困りだろう。というのも、即座に次のように言ってもあながち的外れではないからだ。ドッド夫人は愚かだったけれども、ヘンリエッタに対するオズボーンの最初の意図を見抜けないほど愚かではなかった。この三週間の間にオズボーンの気持ちは大きく変化したというのは事実である。ヘンリエッタ・コングリーブが平凡な女性ではないこと、素晴らしい才能と注目すべき資質に恵まれた人物だということを読者の皆さんは読み取ることができた。ほんの数ヶ月前まで、彼女は世間のことを何も知らなかった。彼女の知性と才能は、独りで勉強し——こう言っても言い過ぎではないと思うが——瞑想することで徐々に形成されていた。制限された生活と長い熟慮の時間のおかげで珍しい知的完全性という状態に彼女は達していた。彼女には教養があったが、それは、生まれながらにどれほど豊かな才能を持っていようと、その言葉が若い女性に用いられることがほとんどない意味においてそうであった。彼女は、ここで述べる必要のない家庭の事情で、大抵の女の子より遅れて社交界にデビューした。世間に存在するということや世間の一部であるということがどういうことであるか、そして、おしゃべりをし、話を聞き、人を好きになったり人に好かれたり、誉められたりお世辞を言われたり、関心を持たれたりということがどういうことであるのかを学んだとき、彼女の見事な才能と美しい知性は入念に隔離された場所で成熟し、突然豊かに開花し、最も美しい果実を実らせたのだった。コングリーブ嬢はまさしく、趣味が良く感情豊かな男性なら真剣に関心を持たずにはいられないような女性であった。フィリップ・オズボーンはまさしくそのような男性だった。彼が友人の死にどのように影響されたかを見れば、オズボーンが感情豊かな人物であることが分かると思う。そして、そのような友人を選んだことが彼の趣味の良さを示している。カーペンター夫人のパーティが終わったとき、いわば神秘にもたらされたかのような衝動にしたがってオズボーンは行動し始め——ウィルクス夫人のお宅で紹介され、素晴らしい如才の無さと分別で申し分のない足がかりを得ると、彼は心の奥底で次のように感じ始めた。グラハムは、命がけでコングリーブ嬢の好意を得ようと、美しい感性の最も深い部分をあらわにしたのだと。少なくとも一週間の間——その週は、前例のない幸運とより良い目的の達成にふさわしいある程度の確信とともに、オズボーンは、あの手この手を使って彼の美しい犠牲者と十回以上も話をする機会を得た——彼は強い情熱的な興奮の影響下にあり、そのために、高潔な美しさの中でその若い女性を見ることができなくなっていた。彼は自らの意図と作戦の効果に心を奪われていた。しかし徐々に、彼女を目の前にするとまったくわれを忘れるようになり、彼女の家を出たあとでようやく自分には果たすべき神聖な役割があったのだと思出すのだった。グラハムの絶望の深さに彼が思いをはせるのはそういうときであり、女性というものは素晴らしい美しさと酷い裏切り、まばゆいばかりの光と漆黒

の暗闇を合わせ持つことができるのだという考えに、悲しくそして痛ましく当惑し始めるのはそういうときであった。冷たく暗い裏の面と同じように彼女の明るい面について彼は確信していた。しかし、その二つを結びつける輪はまったく見つけることができなかった。いったい自分はなぜこのような形而上学的重荷を引き受けることになってしまったのだろうと彼はときどき考えた。「どうしてあいつはそんな危ないことにかかわりあってしまったのだろう？」それでも彼は浮かんでいた。向こう岸でそわそわと行ったり来たりしている友人の霊がいる場所へ、彼は水流の中をボートを漕いでいかなければならないのだ。

表向き反感を示した最初の振る舞いのあと、ヘンリエッタ・コングリーブは、友人かつ姉の家の常連客としてとても喜んでオズボーンを迎えるようになった。彼は、自分が次のように考えても馬鹿げていることにはならないと考えた。つまり、読者がどう考えようと、自分の行動全体が浮かれた愚か者のそれだとオズボーンが考えていないのは言うまでもないこと、そして、彼女を取り巻くほとんどの若い男性よりもヘンリエッタは彼に好意を持っていると考えることである。オズボーンは自分の持って生まれた資質を正しく評価していたし、感情的なことに厳しく制限しなくても、より洗練された社会的な目的のために、ひとかどの人物になる素質も備わっていることが分かっていた。彼はささいな事には関心がなかった。しかし、ウィルクス夫人の客間ではささいな事はほんのわずかな役割を果たすに過ぎなかった。ウィルクス夫人は単純な女性だったが、愚かなわけでも軽薄なわけでもなかった。そして、コングリーブ嬢はさらに優れた理由でこれらの欠点からの影響を免れていた。グラハムがかつて多少の苦々しさを込めて次のように言うのを聞いたことを思い出した。「女性は本当は自分に何か言ってくれる男性だけが好きなんだ。女性はいつも何かのニュースに飢えているんだ」オズボーンは、コングリーブ嬢が通常あつまられる以上のニュースを自分がもたらすことができることを考えて満足した。彼は素晴らしい記憶力を持っていたし観察力も鋭かった。その点についてはコングリーブ嬢も同じだったが、社会についてのオズボーンの経験はもちろん彼女のそれよりも十倍の広がりを持っていたし、彼は常に彼女の不完全な推論を補足し、間違った憶測を正すことができた。彼女の憶測は素晴らしく如才がないように思えることもあったし、無邪気で愉快なこともあった。しかし彼は、まったく新しい事柄が持つ魅力についての事実を彼女に提供できる立場に自分があることにしばしば気づいていた。彼は旅行をし、男女を問わずさまざまな人物に会ってきたし、もちろん、通常女性が読むべきではないと考えられている多くの本を読んでいて。彼には自分の強みがよく分かっていた。しかし、彼の知的な資質を披露することによってコングリーブ嬢が大変楽しんだとしても、一方で、彼女の関心が彼の知性に非常にさわやかな影響をもたらしているようにも思えた。

三週間が経ったとき、おそらく理由がないことではなかったが、一撃を加える状況になったと彼は考えたのかもしれない。もちろん、分別のある女性にとって、ある男性を良い友だちだと考えることと、彼を魅力ある話し相手と考え心を許してしまうこととの間には大きな隔たり

がある。ヘンリエッタがこれらの長所について考えているとオズボーンが信じるのも当然だった。しかし、客間の扉を閉め、耳をすませば、彼女が気を失って床に倒れる音が聞こえるだろうという確信とともにここで彼が退出しても、彼は寂しく無視され失望していただろう。彼は自分の帝国の質を試す機会を求めていた。もし仮に彼が一週間でも別の女性に気が魅かれていふりをする事ができたら、コングリーブ嬢は態度をはっきりとさせるかもしれない。自分にはほんのわずかな兆しさえ読み取ることができるのだとオズボーンはうぬぼれていた。しかし、他のどんな女性がこのように一時的な情熱の対象としての役割をそれなりに果たせ得るというのだろうか？オズボーンにはドッド夫人しか思い浮かばなかった。そして、ドッド夫人について考えるということは、それをあきらめるということであった。コングリーブ嬢と親しくしている男性が、他の女性（非常に古くからの友人を除いて）を好きになるふりをするということは、すべての真実をはなはだしく侮辱する振る舞いだった。したがってオズボーンは、ヘンリエッタの率直な関心に対して、うわべだけの恋愛ゲームを演じることで満足するほかはなかった。しかし、ゲームはこのペースでゆっくりと進んだ。彼の事務所では恐ろしい速度で仕事がたまっていった。このまま一生コングリーブ嬢にかまけているわけにはいかなかった。彼女をおびき出す害のない手法について考えた。彼には自分の戦略がまったく成功していないわけではないように思えた。そして場合によっては、コングリーブ嬢は愛情をめぐって恋敵に嫉妬することもあるかもしれないと考えた。にもかかわらず、手を引きゲームを終わらせたい強い衝動に駆られた。ゲームはあまりにも加熱しすぎていたのだ。

私がこれからお話しする出来事は、オズボーンがドッド夫人を訪れた数日後に起こった。目に見える現実の若い女性に架空の情熱を抱くことは不可能だと判断したオズボーンは、情熱だけではなくその若い女性をも作り上げてしまうことにした。ある朝、社交シーズンに合わせてニューポートで開業していた写真館のショーケースの前をとおりかかったとき、若くて非常に美しい女性の肖像写真に気を引かれた。色が白く上品で、服装のセンスも良く、姿勢も素晴らしかった。魅力的な表情をしており、それなりの家柄の女性であることは明らかだった。オズボーンは中に入って、肖像写真のモデルが誰なのかを尋ねた。写真家はネガを処分してしまっていて、名前の記録は残っていなかった。しかし、彼はその女性をはっきりと覚えていた。写真は夏の撮られたものではなく、写真館の本店のあるボストンで昨年の冬撮られたものだった。彼は次のように言った。「完璧な写真だと思いましたので、とっておいたんですよ。しかも、こんなに美しいモデルですから！これだけ素晴らしいものはそんなにたくさんはありません」しかし彼が言うには、一般の人の目にはその写真はあまりにも良すぎるということだった。オズボーンはその写真の良さが分かるセンスを持った最初の人物だそうだ。

「それならより好都合だ」とオズボーンは思った。そしてすぐに、その写真を売ってくれるよう申し出た。もちろん写真家は良心の呵責を感じていた。彼のことを信頼して来てくれた女性の肖像写真を売ることは彼の原則に反することだった。彼の名誉のために言うておくが、彼は

自分の原則を守ることにし、オズボーンにはその写真を売らせることはできなかった。しかし、写真家はそれをオズボーンに無料で譲渡することには同意した。オズボーンはそれに相応しい人物だからだそうだ。その代わり、オズボーンは別の肖像写真をあらたに購入するという提案だった。そのときまでにオズボーンはすでにその肖像写真が大変気に入っていた。その提案を聞いて、彼は深刻な顔つきをした。そして、その作品一つだけ売ることができなくても、二つなら売ることができるのではないのかと提案してみた。写真家はそれを断り、自らの申し出を繰り返した。オズボーンは相手の言うとおりにすることにした。そしてその代わり自分の肖像写真を撮ってもらうことになった。続く三十分の間に、オズボーンの頭や肩の位置について写真家は十数回考察を加え、姿勢や表情についてもそれと同じくらいの工夫を試してみた。

「一流のモデルですね」とその写真家は言った。「素晴らしいですよ。この女性の写真に匹敵するほどです」

オズボーンは、時間のあるときに調べて、どれにするか決めたら、たっぷり注文するよと約束して、数ダースの見本を抱えてその場を立ち去った。

その日の夕方、彼はウィルクス夫人を訪れた。ウィルクス夫人はベランダで、外気に当たりながら客とお茶を飲んでいるところだった。暗かったので、オズボーンにはそれが誰なのかわからなかった。ウィルクス夫人が彼を紹介すると、その客はドッドと申しますと礼儀正しく名乗った。「いったいどうして彼女がここにいるんだ？」とオズボーンは思った。もちろん、コングリーブ嬢ではなくドッド夫人に会うとは大きな誤算だった。しかしオズボーンは、外から見る限り実に愛想よく腰かけ、ヘンリエッタが姿を見せるのを待っていた。ようやく椅子を客間の窓の並びに移すと、ランプのそばで読書をしている若い女性が見えた。彼女は部屋に一人でおり、読書に集中していた。真っ赤なシルクの飾りやアラベスク模様に覆われたグレナディン織りの白いドレスを着ており、そのためどこか幻想的な雰囲気があった。休息のわりに彼女の表情は重々しく、眉間に皺を寄せてまるで読書に完全に心を奪われているかのように見えた。右ひじをテーブルの上に置き、後頭部に束ねた髪からぶら下がっている長い巻き毛を機械的に手でよじっていた。今がチャンスだと思ったオズボーンは、ご婦人たちをベランダに残して客間に入って行った。コングリーブ嬢は椅子から立ち上がりせずに、古い友人として彼を迎えた。

ドッド夫人に同席することを彼女が避けていることを非難するふりをしてオズボーンは話を始めた。

「避けているですって！」とヘンリエッタは言った。「随分とドッド夫人にご親切なのね」

「僕が親切だとしてもあなたと同じ程度だと思いますが」とオズボーンはさらに言った。

「ええ、多分おっしゃるとおりでしょう。本当のことを言うと、私はあまり親切とは言えません。とにかく、ドッド夫人は私に会うつもりはないのです。私の姉に会いに来たのだと思います」

「ドッド夫人がウィルクス夫人をご存じだとは知りませんでした」

「知り合いと言っても二時間程度のことですけど。ご存じだと思いますけど、彼女とは七月にシャロンで会いました。以前彼女は私にとっても失礼な態度でした。それで彼女は私とおつき合いうるつもりはないんだと思いました。でも、今日の午後馬車で出かけたとき、馬車が岩に乗り上げてしまったのです。姉と私が降りたとき、頭の大きさほどもある海藻を抱えて一人でうろうろしているドッド夫人に出会いました。彼女が私のところに駆け寄ってきたので、アンナに紹介しました。彼女がかなりの距離を歩いてきたことを知ると、アンナは彼女を馬車に乗せたのです。ドッド夫人は馬車を持っていない友人のところに滞在していて、とても困っているようでした。彼女を乗せて一時間ほどドライブしました。面白い方ですわ。海藻を全部捨てておしまいになったのよ。そこでアンナが家に寄ってお茶でも飲んで行くようにお誘いしたのです。お茶のあと、死ぬほど屈辱な二時間を我慢して私はここに避難してきたというわけなのです」

「もし彼女が面白い人なら、どうして我慢なんておっしゃるのです？」とオズボーンは言った。

「まさしく彼女が面白い方だからですわ」

「ああ、彼女が失礼な態度だったことをまだ許しておられないのですね」

「そのとおりですわ。まだ水に流したというわけではありません。彼女にはまったく我慢ができません」

「しかし、ドッド夫人の方はもうすっかり水に流されたようですが」

「夫人の方には水に流さなければならないようなことは何もありませんわ」

しばらくすると、オズボーンはポケットから写真を取り出した。それをヘンリエッタにわたすと、どれがいいか意見を聞きたいと言った。コングリーブ嬢はそれらを熱心に調べて一枚を選んだ。「これがいいと思います。これと比べると残りはつまらないものばかりですわ」

「つまり、注文するのはこの一枚だけでいいとおっしゃるのですね？」

「いいえ、お好きになさればいいと思います。とにかく私はその一枚がいいと思います。もし注文されるのなら、私にも一枚いただけますかしら。でも、残りのものは結構ですわ」

選ばれた一枚と他の写真との違いが分からないとオズボーンが反論すると、コングリーブ嬢は天と地ほどの違いがあると断言した。写真のサンプルを書類ケースになおそうとしたとき、オズボーンはボストンのあの若い女性の写真を床の上に落とした。

「あら、女性のお写真ですね。拝見してもよろしいかしら」とヘンリエッタは言った。

「一つ条件があります」それを拾い上げながらオズボーンは言った。「写真の裏は見ないで下さい」

オズボーンについてこんなことを言わなければならないのは情けないが、実際のところ、写真の裏には何も書かれていなかった。もしコングリーブ嬢が彼の言いつけに従わなかったら、オズボーンはとても気まずいことになっていただろう。しかし、ヘンリエッタの様子が変わったところはほとんどなかったので、心配する必要はないとオズボーンは思った。

「どなたですか？」写真を見ながらヘンリエッタは尋ねた。「とてもチャーミングな方だわ」

「フィラデルフィアのトンプソン嬢です」

「まさか、ドラ・トンプソンじゃないでしょうね？」

「いいえ、違います」オズボーンはすこし緊張して答えた。「彼女の名前はドラではなく、そんな感じの名前でもありません」

「そんなに嫌味におとりにならなくてもいいでしょう。ドラはとってもかわいい名前だと思います」

「そうですね。しかし彼女の名前はもっとかわいいのです」

「とても聞きたいわ」

オズボーンは突然深い水の中にいる自分に気がついた。行き当たりばったりで適当に答えた。

「アンジェリカっていうんです」

コングリーブ嬢がどこか皮肉っぽく微笑んだようにオズボーンには思えた。「そうですか。彼女の名前よりお顔の方が素敵ですわ」と彼女は言った。

「ああ、あなたがそうおっしゃるなら、僕もそうです」とオズボーンは笑って答えた。

「オズボーンさん、彼女の話を話して下さい」とヘンリエッタはさらに続けた。

「あの容姿を見れば、世界で一番美しい女性に違いありませんわ」

「おやおや」椅子の後ろにもたれて天井を見ながらオズボーンは言った。「そうですね、おそらく。あるいは少なくとも、私はそう思うと言っても許されるでしょうか」

「あなたがそうおっしゃらなかったら、それこそ許し難いと私は思いますわ」と、オズボーンに写真を返しながらかヘンリエッタは言った。「確かにどこかで会ったことがあるような気がするのですけれど」

「大いにあり得ますよ。彼女はニューヨークに来ますから」とオズボーンは言った。ここで会話を別の話題に移した方が賢明だと彼は考えた。コングリーブ嬢は黙っており、彼女は頭の中でいろんなことを考えているのだとオズボーンは思った。アンジェリカ・トンプソンに嫉妬しているのだろうか？そう考えてもおかしくないようにオズボーンには思えたし、プライドが高すぎて質問することができないようにも思えた。

ウィルクス夫人はドッド夫人から彼女の居場所を聞き出すことに成功し、お帰りのときは誰かに送っていかせると約束していた。ドッド夫人が帰り支度をしているとき、オズボーンは自分も失礼するので彼女を送っていくと申し出た。

二人がウィルクス夫人の家を出るとドッド夫人が言った。「ところで、あなたのちょっとしたゲームは上手くいっているようね」

オズボーンは何も言わなかった。

「あのね、オズボーンさん」いらいらした気持ちを上手く隠せずにドッド夫人は言った。「あなたはいい人すぎるのではないかしら」

「僕もそう思います」

「そんなに素早く同意していなければ、私が言いたかったのは、つまりあなたは間抜けすぎる、と言いたかったところですけど」とドッド夫人が言った。

「それにも同感です」オズボーンは言った。

翌日彼は、仕事大量にたまっているのでできるだけ早く帰ってくるようにという手紙を同僚から受け取った。同僚は手紙の中でつけ加えていた。「女性のこと——名前は忘れちゃったけど——は分かっている。もし彼女が必要ならば一緒に連れて帰ってきたまえ。しかし、とにかく君が帰ってこなきゃいけないんだ。君がいなければ事務所は休止状態だ——消化ができないのにお腹は一杯という恐ろしい状態だ」

古いたとえを使うと、昔の騎兵隊の突撃ラッパの音のように、この手紙はオズボーンの胸にずしんと響いた。無駄にした貴重な時間やまったく無意味だった朝の長い時間のことを考えると、突然恥ずかしくなって彼はその気持ちに圧倒されそうになった。彼は影に向かって香をたき、その煙が影を消してしまっているのだった。その日の午後、お別れに海を見たくなくて岸壁の方へ歩いて行った。困惑し、悲しく、頭の中は混乱していた。火遊びをして指を火傷したのだと認める心の準備はまだできていなかった。しかし、このゲームから彼が何も得なかったことは確かだった。一体どうしてヘンリエッタ・コングリーブは彼の人生に入り込んできたのだろう？結局、彼の時間とエネルギーが失われ、残酷な気分になるだけなのに。頭の中から彼女を追い出すことができるなら大抵のことはしただろう。しかし彼女とはどまっておき、彼女がとどまっている間、彼は彼女を憎んだ。結局のところ、自分の復讐心に完全に惑わされたというわけではなかったのだ。彼は彼女を憎み始めていたし、今も憎んでいた。岸壁に向かう途中で、馬車に乗って一人で出かけているウィルクス夫人に会った。夫人のとなりのヘンリエッタの席は空席で、それは彼にヘンリエッタが家にいることを示し、彼が訪ねてくるのを彼女は待っているのだとさえ告げているように思われた。とにかく、海にお別れをする代わりに、彼はヘンリエッタのところに行った。別れの挨拶は冷たく形式的で苦々しいものになるかもしれないと思った。

招き入れられた彼は客間をとってベランダに出た。庭で甥を膝の上に乗せ、おとぎ話を読み聞かせている彼女がいた。彼女は彼が座れるようにベンチに場所を空けたが、子どもは抱いたままだった。オズボーンはこの光景にかなり混乱した。次の瞬間、彼は少年を自分の膝の上に座らせた。それから、その日の夕方ニューポートを離れるつもりだと短く伝えた。「それで、あなたはいつお帰りになるおつもりなんですか？」と彼は尋ねた。

「姉はクリスマスまでいるつもりなので、私も一緒にいたいと思っています」とヘンリエッタは答えた。

オズボーンはうなだれ、彼の幻想が調子はずれに壊れていく音を聞いた。彼女が顔色を失ったり、声を震わせたりするのを待ったが、無駄だった。彼が顔を上げたとき、彼女と目が合っ

たが、彼の表情に彼女は驚いた。

「トム、ジェインのところに行って叔母さんの扇子を取ってきてちょうだい」

子どもが立ち去り、オズボーンも立ち上がった。一瞬ためらったが、ヘンリエッタも立ち上がった。「行かなければなりませんの？」と彼女は尋ねた。

オズボーンはそれには答えず、充血した目で彼女を見つめていた。その激しさが彼女を困らせ、怯えさせた。

「コングリーブさん」オズボーンは不意に言った。「僕はみじめな男です」

「何てことをおっしゃるの！」とヘンリエッタはやさしく答えた。

「僕の事などまったく気にかけない女性を愛しているのです」

「本当ですか？」ヘンリエッタは何も気づいていないかのように言った。

「間違いありません。僕は彼女を敬愛しているのです」

「その方があなたのことを気にかけていないというのは本当ですか？」

「ああ、コングリーブさん！もし想像することさえできたら、もし希望があれば——」オズボーンは叫んだ。そして彼女の手を取るかのように自分の手を差し出した。

ヘンリエッタは青ざめ、顔をしかめて、胸に手を当てて身を引いた。「お望みにならないで！」と彼女は言った。

その瞬間、客間の窓からトム・ウィルクスが再び現れ、「ヘンリエッタ叔母さん、新しいお客様だよ！」と言った。

コングリーブ嬢とオズボーンが振り向くと、客間からベランダに若い男性が出てくるところが見えた。ヘンリエッタは小さな声を上げると、急いで彼を出迎えに行った。オズボーンはその場に立っていた。コングリーブ嬢はその男性と心のこもった挨拶を交わし、庭の方に招き入れた。彼女が近づいてきたとき、彼女の青ざめた表情がばら色に赤く染まるのが分かった。彼女は美しかった。

「オズボーンさん、ホーランドさんです」と彼女は言った。

ホーランド氏は礼儀正しくお辞儀をしたが、オズボーンはまったく頭を下げなかった。「それでは、さようなら」とヘンリエッタに言った。

彼女は何も言わずに頭を下げた。

二人だけになったとき彼女の友人は尋ねた。「ヘンリエッタ、今のは誰だい？」

「ニューヨークのオズボーンさんです。気の毒なグラハムさんのお友だちですわ」とヘンリエッタは言った。

「ところで、グラハム氏が亡くなったことは聞いたかね」

「ええ、聞きましたわ。オズボーンさんが知らせて下さいました。本当に…ねえ、どうお思ひになって？グラハムさんはもう長くないかもしれないと手紙に書いてこられたのよ」

「もう長くない？彼はそう言ったのか？」

「正確には覚えていませんわ。手紙は捨てちゃいましたの」

「そんな手紙は書かない方が趣味がいいと思うけどね」

「趣味ですって！そんなものはもうとっくに無くしておいででしたわ」

「そうかね。彼の狂気には秩序だったところがあったね。ふつう自殺する者は、案内など出さないものだよ」

「自殺ですって？ どういうことなの、ジョージ！ どういう意味なの？」 コングリーブ嬢の顔は青ざめ、恐怖で大きく開いた目で相手を見つめていた。

「ああ、ヘンリエッタ、突然だったことは許してくれたまえ。知らなかったんだね？」 とその若い男性は言った。

「そんなことって—— 何て恐ろしい！ 手紙は捨てずに持っていればよかったわ」とヘンリエッタはゆっくりと言った。

「君が持っていないことを嬉しく思うよ。恐ろしい出来事だ。忘れてしまいなさい」

「恐ろしいわ、恐ろしいわ」 声を震わせてヘンリエッタはつぶやいた。あふれ出る涙で彼女の声は震えていた。気の毒なことに、わずかに五分の間に驚くことが三回もあった。感情を抑えきれず、突然泣きじゃくった。ジョージ・ホーランドは彼女を引き寄せ、力強く抱きしめ、口づけをし、耳に慰めの言葉をささやいた。

夕方、オズボーンはニューヨークに向かって出発した。船でドッド夫人に会った。彼女も訪問を終え帰るところだった。彼女はドッド少佐とかいう軍人と一緒だったが、彼女の亡くなった夫の弟という話だった。その男性は彼女の従弟にもあたるのだそうだ。彼は独身で善良な人物だった。男性に仕える立場にいることを感謝している身寄りのない義理の姉にとっても親切だった。一般的には身寄りのない女性が男性に仕えるのは当然だと考えられているにもかかわらず、ドッド夫人が彼に仕えることを当然のこととする気は彼にはまったくなかったことを断言しておきたいと思う。「マリアとはすでに二重につながってるんです。もし結婚するとしても、身内の中でするのはまっぴらごめんだ」と、あるとき彼が話していたそうである。彼は姉を家に連れて帰るためにニューポートに来ていた。ドッド夫人はすぐに彼をオズボーンに紹介した。

きれいに晴れわたった和やかな夜だった。船が順調に航海を始めると、ドッド夫人と二人の男性は上階のデッキへ出かけて行き、星明かりの中に座った。容易に想像がつくように、オズボーンはおしゃべりをするような気分ではなかったが、ドッド夫人をまったく無視するわけにはいかないと感じていた。美しい夜と、暗く輝く海と、きらめく星空の影響で、ドッド夫人はきわめて感傷的になっていた。友情、愛、死、永遠の生命について彼女は語っていた。オズボーンには次に彼女が何を言い出すか分かっていた。すぐに彼女は、高揚した話の話題に気の毒なグラハムのことを持ち出した。少佐が同席していることを考えると、オズボーンにはそれはあまり趣味の良いことには思えなかった。我慢ができなくなって、煙草に火をつけてもいいか聞くことで彼女の話の腰を折った。彼女は憤慨して「階下に降りる」とすぐに言った。オズボ

ーンは失礼なことをするつもりはなかったので、客室までお供すると申し出ることによってドッド夫人の好意を取り戻そうとした。彼女は彼の付き添いを受け入れ、個室の入口まで彼はついて行った。そこで彼女はお休みの挨拶のために手を差し出した。

「それで」と彼女は言った。「コングリーブさんとはどうなりました？」

オズボーンはあからさまに顔をしかめた。「コングリーブさんは婚約しているのです」

「どなたと？」

「ホーランドさんです」

「ああ！」手を下ろしてドッド夫人は叫んだ。「なぜ婚約を破棄させなかったの？」

「ドッドさん、何をおっしゃるんです」とオズボーンは言った。

ドッド夫人は軽蔑するような微笑をうかべ、肩をすくめて背を向けた。「気の毒なグラハムさん！」と彼女は言った。

彼女の言葉を聞いて、オズボーンは顔に一撃を食らったような気がした。「グラハム！」と彼は叫んだ。「グラハムは馬鹿でした！」と彼は言い返した。そうせずにはいられなかった。

彼は上の階に上がりデッキに出たが、思わず言い返した口調の激しさでまだ震えていた。デッキの端まで歩いて行き、手すりから身を乗り出し、船の航跡に泡を立てて渦巻く暗い海水の深淵をのぞき込んだ。煙草の端をはじき飛ばし赤い光の粒が落下して暗闇に飲み込まれていくのを見ていた。彼は悲しく意気消沈していた。激しく湧き上がる暗闇に死が間近で大きく口を開けていた。彼をも誘惑しているのだろうか？彼は身震いしてその場を離れドッド少佐のそばに戻った。

少佐は何か考えているかのようにしばらく黙っていた。しばらくしてとうとう半分申し訳なさそうに笑って言った。「ドッド夫人は妙な幻想のもとで動き回っていたのです」

「どういうことです？」とオズボーンが言った。

「あなた自身はグラハム氏をご存じだったんでしょう？」と少佐は続けた。

「ええ、知っていました」

「とても気が重くなるような事件でした」と少佐が言った。

「とても気が重くなるような事件でした」と彼は少佐の言葉を繰り返した。

「彼女がどういう経緯でこんな狂気の沙汰にかかわることになったのか知りませんが、その若い女性に激怒するところまでいったようです」

「若い女性といますと？」

「コングリーブ嬢ですよ。お分かりでしょう。彼の悩みの対象ですよ」

「ああ、そうでしたね。」オズボーンはひどくまごついた

「本当のところは」少佐は体を寄せ、内緒話をするかのように低い声で言った。

「あのような状態の男性と恋に落ちることがあるとして、ドッド夫人はその程度には彼と恋に落ちたのです」

「そんなことがあり得ますか？」何に対して反感を抱き、何に対して不愉快なのか分からずにオズボーンは言った。というのも、少佐の遠回しな話し方が謎だったからだ。

「ああ、私はシャロンに三週間滞在していたんです」と少佐は続けた。「義理の姉に会いに行って、すべてを見てとったのです。私はかわいそうなグラハムをコングリーブ嬢から引き離そうとしたのですが、彼は聞く耳を持ちませんでした。彼がよく話しをしたというわけではないのですが。あまりおしゃべりをするタイプではありませんでしたが、ドッド夫人と私には胸の内を明かしてくれました—— 私たちは同じ家に滞在していたのです。もちろん、すぐに私はすべてを理解しました。そしてゴングリーブ嬢をとてつきの毒に思ったのです。彼女はとても上手にそのことを受け止めていましたが、とても努力のいることだったに違いありません」

オズボーンは椅子から飛び上がって叫びました。「どういうことなんです、少佐？何をおっしゃっているのです？」

少佐は一瞬きょとんとしていたが、次の瞬間どつと笑い出した。「ということは、あなたもドッド夫人と同じ意見だということですね？」少佐は落ち着きを取り戻しながら言った。

「私が少佐のことを理解できないのと同じように、私にはドッド夫人のことが理解できません」

「では、オズボーンさん」と、少佐は立ち上がって手を差し出した。「失礼をお許し下さい。しかし、私は自分の意見にはこだわるつもりです」

「その前に、どうかあなたの意見というのをお聞かせ下さい」

「まあ、今回のことは全部が茶番です」

「どういうことですか」とオズボーンは叫んだ。「それは単なる意見ではないでしょう！」

「それでは、あなたにはご自分の意見があるということだ。あの男は狂気じみていましたよ」

「ええ！」とオズボーンは声を上げた。彼の驚きの声は大変多くのことを語っていた。しかし、少佐はそれを自分に対する抗議だと解釈した。

「彼は偏執狂だよ」

オズボーンは黙っていた。

「あなたもそのことを疑ったことがあるでしょう？」

「正直に言いますが、そんなことを疑ったこともありません」とオズボーンは言った。

「それでは」と少佐は礼儀正しい調子で言った。「君は新しいことを知ったというわけですから—— 何も犠牲を払わずに」

オズボーンは深く息を吸い込んで、深刻な表情で言った。「いいえ！何も犠牲を払わずにというわけではありません」デッキを見つめながらオズボーンはしばらく黙って立っていた。ドッド少佐は煙草をふかしながらオズボーンを斜めに見ていた。オズボーンはついに視線を戻した。「それでヘンリエッタ・コングリーブは？」

「ヘンリエッタ・コングリーブは世界で最も美しい女性です。何も言わないで下さい。彼女の

ことはよく知っています」と、軍人らしい率直さと勇ましさに少佐は答えた。

「彼女はグラハムと婚約しなかったのですか？」

「婚約？ 彼女は彼のことを見たこともありません」

「でも、彼は彼女と恋に落ちていました」

「ああ、それは彼の問題です。彼は彼女を死ぬほど悩ましたのです。彼女は優しく親切にしていました——それで彼はもっと悪くなったのです。それで、彼に会うことを彼女が断ったとき、気の毒な彼は彼女に見捨てられたと思ひ込んだのです。それは彼の思い込みで、彼はそれをドッド夫人に信じ込ませたのです」

オズボーンの静かな内省、つまり、鬱々とした気分から解放され、あっけにとられた彼の心に秘められた雄弁についてここに詳述する紙幅はない。しかし少佐は、片手で積荷を軽くしたかと思えば、もう片方の手でそれを重くした。オズボーンは今のいままでグラハムに同情したことなどなかった。「私は彼のことをよく知っています」彼は大きな声で言った。「彼は最高の男性です。彼女は彼に好意を持っていたかもしれません」

「とんでもない！ 気の違った男をどうして女性が愛することなどできますか？」

「きつい言い方をされますね。六月に彼と別れたとき、あなたや私と同じように彼は正気でしたよ」

「どうやらそれでは、その間に彼は気が違ってしまったんでしょう。健康状態も悪かったですから」

「しかし、人は理由もなしに気が違ったりしません」

「それでは、コングリーブ嬢が理由だということにしましょう」と少佐は言った。「それでも、彼女は意図せずそうなったのだと私は断言します。どうして彼女が彼をいい加減にあしらうなんてことが考えられるでしょう？ 彼女は別の男性と婚約していたのです。神のおお考えになることは理解し難い。幸運なことに」と少佐は続けた。「最悪の部分については彼女は知らずに済みました」

「どういうことです、最悪の部分って？」

「いや、あの、彼は自殺したのです」

「ああ、あなたの魂に祝福がありますように。コングリーブ嬢はそのことを知っています」

「いや、それは違うと思う。今朝、彼女はそれを知らなかったのだから」

オズボーンは、恐怖の網に絡み取られている自分に気づき、胸が悪くなりわけが分からなくなった。「ああ」彼は苦々しく言った。「それでは彼女はそれを忘れてしまったのです。一ヶ月前にはそのことを知っていましたから」

「いやいや」と少佐はきっぱりと言った。「今朝、勝手ながら彼女を訪ねてみました。シャロンにいたときのグラハムについて少し話したとき、彼が亡くなったことに触れてみました。そのことについてはすでに聞いていたようでしたので、私はそれ以上何も言いませんでした——」

「それで？」とオズボーンは尋ねた。

「それで、彼女はグラハムが病気で亡くなったと思っているのです。いつまでもそう思い続けていることを祈っています！」

その夜——オズボーンはデッキに一人で二時まで座っていた——多くのことに思いを馳せながらドッド少佐の最後の祈りを熱心に繰り返していた。

大病には荒療治が必要だ。オズボーンは今や独身ではなかった。不思議なことに、自分の肖像写真六ダース分の料金を払って購入した写真に写っていたあの若い女性に彼の妻はそっくりだった。しかし、彼女の名前はアンジェリカ・トンプソンではなかった——ドラでさえなかった。